
Devil May Cry Kill The Shadow

橘 疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry Kill The Shadow

【ZIPコード】

N2301D

【あらすじ】

大剣と二丁の連射銃がトレードマークのデビルハンター、ダンテ。そんな彼の元に、奇妙な手紙がやって来る。「ハーフムーンシティの光を、闇から守って下さい。報酬はたっぷりです。ハーフムーンシティの母より」手紙にはそう書いてあり、悪魔の気配を感じ取ったダンテは、ハーフムーンシティに向かう事に。そこで出会ったのは、母親を捜す少女。そして、少女を狙う無限数の悪魔達。ダンテは無事少女を守り、街にはびこる悪魔を倒せるのか…?

PROLOGUE : Beginning(前書き)

どうも、橘です。

デビルマイクリーを知ってる人も、知らない人も、これから知るう
とする人も、楽しめる作品を書けたらいーなと思います。
感想・批評は作者の頭のエネルギーになります。よろしくお願ひし
ます。

そいつらは、まさに悪魔と呼べる外見だった。

黒と紫が混じつたグロテスクな体は、巨大で、恐ろしかった。狼が無理に一本足で立っているかのよつた、奇妙でおぞましい生物は、鉄さえも砕けそうな鋭い牙をむき出しに、夜空に向かつて咆哮した。

目は真っ赤で、飢えており、口の中も血のよつに赤い。爪は鋭く長く、その体は人間の何倍もある大きさ。

まさに、悪魔だ。

「あつ……あ」

少女は体から力が抜けるのを感じた。
倒れ込むようにして、建物の裏の壁を背に、座り込む。
身動きができない。
動いたら、すぐにでも殺されそうだ。

バーの路地裏で、五体の悪魔が、彼女を囮のようにして睨んでいた。睨んでいる間にも、そいつらはジリジリと少女に近づいている。まるで、獲物に手を出すタイミングを待っているかのように。

少女の目から涙がこぼれた。

恐怖で体が震え、息も満足に出来ない。

突然、悪魔の一体が前に飛び出した。

少女の方へと。

もう駄目だ、死なんだ、と少女は目を閉じた。
暗闇の中で、体が痛みに耐えようと必死に力を込めているのが分かる。

始めに聞こえたのは、鋭い音。

そして、液体が噴出しているかのようなドバッとした音と、天も搖るがすような轟音。

けど、痛みは感じない。

ゆっくりと目を開けると、信じられない光景が広がっていた。

返り血を浴びたような色のロングコートを羽織り、片手に大剣を持つ了銀髪の男。

そして、胸から血を噴き出す悪魔。

「大丈夫か？」

男が振り向いた。銀髪に血がかかっている。

悪魔が、血が吹き出る胸を手で押さえた。

残りの悪魔達が、動搖する。

が、一体が男を狙つて飛び出した。

男はそれに気付かず、ずっと少女の方を向いている。

「あ、あぶな……」

かされた声で忠告するが、男は無表情でこっちを見るだけ。

そして、背後の悪魔を、上に蹴り上げた。

悪魔が蹴りをもろに受け、吹っ飛ばされる。

まるで、ゆっくりと流れる動画を観ているようだ。

宙に舞う悪魔。

そして、銃を構える銀髪の男。

「ライブを始めるぜ」

男がそう呟いた直後、彼の銃から銃弾が連射される。
そして、宙を舞う悪魔の体に、ぶち込まれた。

「グ、グウウ……」

悪魔の口から苦痛の声が漏れる。

血があたりに飛び散り、少女の体にもかかつた。
冷たい血だった。

突然、時の流れが元に戻るような感触がした。

撃っている間にも二体の悪魔が男の方へと突っ込む。

男が大剣を持つまま体を回転させると、二体の悪魔の体にサッと
浅い傷が出来た。

そして、大剣を一体の悪魔の腹へとぶつ刺す。

「グウウ……！」

悪魔の口から血が溢れ出る。

男は大剣を勢いよく引き抜くと、自分の背後にいる悪魔に気付いた。

「ふん」

男は鼻で笑うと、なんと、バク宙回転した。
宙を舞う男は、まるでさつきの悪魔だ。

ただ違う所は、男はいつの間にか両手に銃を持つていてる事だ。

宙を舞う間にも、男は悪魔に銃弾をぶち込む。
さつきと立場が正反対だ。

血が飛び散るが、男は気にせず、最後の悪魔を見つめた。

「ググウウウ…」

悪魔が低く唸つた。

逃げずに戦う事にしたらしい。

ダツ、と一体と一人が距離を縮める。

悪魔は牙と爪を構え、男はさつきの大剣を構えている。

そして、大剣が悪魔の頭に突き刺さった。

「ガウ……グウゲ」

口と頭から血が、滝のように噴き出す。

悪魔は力を失い、倒れ込んだ。

狭い路地裏に五体の悪魔。

血を拭き取る男。

壁を背に座り込んでいる少女。

血が辺り一面にべつとり付いている。

話は三日前に戻る。

1 / DANTE : The Moon (前書き)

いつも、橘です。

ダンテ編の1が始まりましたね。今回はアクションシーンがありますでした。代わりにダンテがピザを食べているシーンは…いらな
い? ごめんね。ま、これからもよろしく。(今冬休み)

1 / DANTE : The Moon

“ Devil May Cry ”

そう綴られたネオンは、昼間なので光つてない。

事務所にしてはなかなかの大きさを誇るこの建物。

造りは素晴らしい出来ているのに、ここに住む一人の男のせいで、中はピザの箱やらピザの箱やらピザの箱で溢れ帰っている。

そして、事務所の奥の方の大きな机の上に、足を組む男が一人。銀髪で、血の如く赤を基調としたロングコートを羽織り、片手でピザの箱を持ち、片手でピザを食べる。ピザが好物なのは一目見ただけで分かる。

「ダンテさん」

事務所の扉を開けたのは、茶髪の若者。ピザの箱を二箱抱えている。

「ピザですよ……つてもう食べてるんすか！？」

「そこに戻いとけ」

ダンテと呼ばれた男が促す。

「ダンテさん、『そこに戻いとけ』じゃないっしょ？ ツケを払つて下さこよ、ツケ」「

若者はピザの箱を近くのソファの上に置くと、ダンテに向かつて指を振る。

「どれだけたまってるか分かってるんですか？」

「わかんね」

ダンテは最後の一 口を口に入れると、腕を頭の後ろで組んだ。

「いいから置けよ。俺は密だぞ？」

「密つて言つのはお金を持つてくれる人を指す物だと思つてましたけど？」

「なげーよ」

「……」

どつやうり若者は怒りをこらえてこじらしこ。

「帰りますー。ツケは来週までー！ 分かったー！？」

派手な音を立て、扉を閉める。

ダンテは氣にしたよつでも無く、ソファの上のピザを見つめて一 言。

「あの野郎……ストロベリーサンデーを忘れやがったー！」

肩をワナワナと震わせ、神に誓つた。

「ツケなんて絶対はらわねーぞー！」

その声は決意に溢れ、同時に怒りに燃え上がつていた。

ダンテは椅子から立ち上がると、ソファに向かって「ツツツ」と歩いた。

先ほじまでの怒りはどこかへ飛んでいったみたいで、ソファに倒れ込み、昼寝の準備を始める。目を閉じて一秒。

「ダンテさん、お届け物です！」

扉の外から大声がする。

ダンテは小声で悪態をつきながら、扉を勢い良く開けた。

「ダ、ダ、ダンテさん、さん、お届け物です」

そこには震えた声で小包を差し出す男。
何故声が震えているのかと言えば、簡単。

睡眠を邪魔されたダンテの顔は、まるで鬼のようだからだ。

「……どいつも」

皮肉っぽい声を出して、素早く小包を取り、扉をすぐ閉める。
机の方へ歩きながら、包みを開けた。

「ん？」

中に入っていたのは、一枚のボロボロの紙。
椅子に座りながら、早速読み始めた。

『ダンテへ

ハーフムーンシティの光を、闇から守つて下さい。報酬はたつ

ぶりです。ハーフムーンシティの母よつ『

紙の下の方には、竜のシルエットのような絵も描かれている。

「何だこれ？」

眠気はもう無かった。
もう一度読み返す。

「何なんだこれ？」

意味が分からない。

闇って何だ？

光って？

ハーフムーンシティ？

いや、薄々気付いていた。

「闇ってのは、悪魔か……」

そう、悪魔。

「だが光ってなんだ？」

分からぬ。

分からぬけど、なぜかダンテの背中に悪寒が走った。

「くくくく……。面白い。最近体がナマってきた所だ。久しぶりに

R指定ライブでもするか……」

ダンテはそばのギター・ケースを取り、背負った。

そして愛用の一丁の銃、エボニーとアイボリーを持っている事を確認し、扉に向かって早足で歩く。

扉の取っ手に手を伸ばした瞬間、何者がダンテより先に開けた。

「つまつ

危うく扉にあたりかけ、ダンテは向こう側の人物を見た。

ダンテもよく知っている、仕事を持つて来る、律儀な情報屋。モリソンだ。

「ダンテ？ お前何してる？」

「ふん」

ダンテは鼻先で笑うと、例の紙を差し出した。
モリソンは素早く読む。

「何だこれは？」

「わかんねえよ。でも俺の推測どな、多分、聞つてのは……」

「悪魔か」

ダンテが頷く。

「つまり、ハーフムーンシティのある人物を護衛する、か……」

モリソンが神妙な顔で呟いた。

「で、その格好は何だ？」

「だから、行くんだよ。ハーフムーンシティに」

モリソンが驚愕した。

「へえ。普段ズボラなお前が、自分から行動する何て……。何が目的だ？」

「なんだかわからねえけどよ、ただ事じやねえような気がするんだよ」

ダンテが微笑を浮かべる。

「ド派手なライブになるよーな……」

今度はモリソンが微笑を浮かべる。

「くくく。ダンテ、西の方へ歩け。そしたら馬車が現れる。それに乗れ。きっとハーフムーンシティに連れてつてくれるぞ」

「どうせ……」

「その代わり、帰つて来たらシケを全部はらう事」

モリソンが確認すると、ダンテは聞こえなかつたフリをして歩き出した。

その背中を見て、モリソンは溜息をついた。

……

何か別の移動手段を選ぶんだつた、とダンテは後悔した。
西の方へ歩いても、丘が続くだけ。

どこを見渡しても、建物はない。

馬車がどこに出て来るのかも分からぬ。

大体、モリソンには車があるはずだ。

馬車なんて手配せずに、車を貸して欲しい。

ダンテはもう、数えきれない程溜息をついていた。

丘の芝生の上に座っているのだ。

丘をずっと歩いていても、芝生と道が続くだけだから、ここで待ち伏せでもしようかと思つたが……。

「いつ来るんだよ……」

もう一三時間待つてゐる。

田はもう沈みかけていて、夕田の光がダンテを照らした。

突然、パツカパツカという軽快な音が聞こえて來た。

振り向くと、白馬と馬車が、こっちに近づいて來る。

ダンテはイライラしながら立ち上がつた。

ギターケースとエボニー＆アイボリーを持つてゐる事を確認して、
立ち止まつた馬車に近づく。

馬車には中年の男しか居なかつた。

「てめえがダンテかい？」

低い声で男が尋ねて来る。

「そうだ。ハーフムーンシティまで頼む」

「了解」

馬車の荷台に乗り込むダンテを見た男は、早速馬を動かした。

10

何時間か時間が過ぎ、ようやく男がダンテに告げた。

「おい、あと五分もすれば着くぜ」

男のぐぐもつた声が聞こえると、荷台から飛び降り、男にもういいと呟いた。

「いいのかい？」
五分つつたつて……」

「こか、もうここ。ありがとうございます」

ダンテは男に金を握り切らねば、歩を止めた。

「おい！」

背後から男の声が聞こえて来る。ダンテは前を向いたまま「なんだ

？」と尋ねた。

「た、ただの噂なんだがな」

さすがのダンテも気になる。

「この街は、謎の化けもんに支配されちまつてゐるぢやないか？」

それを聞くと、またもや背中に悪寒が走った。

月明かりに照らされたダンテの顔は、悪魔に飢えていた。

1 / DANTE : The Moon (後書き)

タイツォンさん、感想、ありがとうございます。はい、僕的には「デビルメイクライ」のアニメを意識して小説を書いているので、指摘されるのは大変嬉しいです。これからもよろしくお願いします。

まい花さん、大変自信がつきました。ありがとうございます。
これからも橘の「デビルメイクライ」を読んでくれると嬉しいです。表現力豊かですか、それは良かつた。

エボニー＆アイボリーさん、プロローグでの活躍、ありがとうございます。

これからもダンテと共に居て下さいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301d/>

Devil May Cry Kill The Shadow

2010年10月10日18時17分発行